

昭和三十三年十一月 一 講 演

## 「世界情勢と知識階級」

今年の一月十五日の成人の日に大人になったばかりの人の祝いの会が各地で開かれて、私も招かれ二、三カ所行ってみました。青年になった諸君といろいろと話してみたが、これらの人達がそろいもそろって云うことは、「どうも現在は理屈に合わないことばかりだ。だから自分たちが大人になったからには将来の日本を、一と二を合わせると四であるというようにピツタリと理屈で割り切ったような日本にするのだ」といったような意見が非常に多かった。私も今の日本の社会は矛盾に満ちていて、理屈にあわないことが非常に多いことは認めざるをえない。

かねがねこれを痛感して、矛盾に対してはこれを解き明すという微力をつくしているつもりなのですが、しかしながら、総ての物を、理屈だけで割り切るといふことは出来るか否か、よしんば出来たとしても、われわれの生活を幸福にし得るかといえ、問題であると思う。大

体人間の心というものは、智の働きと、情の働きと、それから意の働き、即ち、「智・情・意」という三つの働きが人間の心の働きといわれている。このように分けることは新しい心理学ではないのであるが、話しをするにはこのような分け方をしたほうが便利であるので、その便利にしたがって分けて見たわけである。

この三つの心の働きというものが、どれが尊いとか、どれが卑しいというものではなく、この三つの働きがあつてはじめて人間の心の働きになるわけである。どれが主人公で、どれが下僕になるというものでないということがおわかりになると思います。

ところが、総てを理屈で割り切るといふことは、知識の働きを主人公にして、情、意の働きをその下僕にするといふことで、そういうことは私たちの心の生活を幸福にするものではない。実際、私たちの日常生活をかえりみても、朝から晩まで、理屈ばかり考えているわけではない。

大抵は、理屈を考えずに情のおもむくまま、自分の意欲のおもむくままに行動している。私達は理屈を考える時はなにかにぶつかつて、これはどうなるかと思ふことによつてはじめて理屈を考えるのであつて、吾々は理屈を先に立てて、理屈で割り切つて行動しているわけではない。

よく吾々の日常生活について話しあふことがある。理屈は成程その通りですが、自分の心持ちがその理屈通りになつていない。理屈通りに自分個人の生活を社会生活におしあてると大変なことになる。自分の理屈は間違いないと考へて、それを他人におしつけると大変な摩擦がおきるのである。

一昨年であります、この近所の高等学校の生徒に招かれて話をしたことがある。話がすんだあとで、お茶を呑みながら、生徒諸君と話したのであります、その時一人の生徒さんが突然、「先生、人間というものは何の目的で生きているのですか、目的は何ですか」といふ質問

評論家 阿部真之助先生

があつた。実は私はギクツとしたのであります。というのは私もこの生徒と同じ年代の時、同じような疑問にとりつかれたことがある。ここにいらっしゃる諸君は御存知でないかも知れないが、明治の終りから大正の始めにかけて大変問題になつた、第二高等学校の生徒に藤村操という青年がいた。この青年は人生というものに疑問をもつて、これが解決出来ず、華嚴の滝に飛び込んで自殺した。そのことが非常に世間を衝動させた。当時の青年が思想的な課題としたのは、人生とは何か、人間はなんの為に生きていくかという問題である。しかし、この疑問は神様でなければ解けるものではない。もし人間の目的、人間の生きることの意義が解つていけば、あらゆる問題が簡単に解決できるわけですが、この問題はそう簡単に解決出来るものではない。

その同じ疑問をこの高等学校の生徒になげかけられたのですが、私はこれに答えるすべを知らなかつた。この問題にぶつかるとは、つまり解決のない数学の問題に取りくむのと同じで、計算を何年くりかえした所でつまるどころがない。無駄なことですが、しかし一度は誰れでも考えて見る必要があると思う。

それは、第一義的な人生問題について解決は出来ないであろうが、第二義的なそういう立場におけるそれらの見方、考え方をすることが大切である。

しかし、このままではおけない問題である。ひよつとしたら神というものがあつて、そういう絶対者の目から見れば解つていくかも知れないが、いずれにしても、仲間同志で論議しあつて見ることも必要であります。しかし、その場合、自分の考え方を絶対とせず、相手方の立場を考えるだけの寛容な精神が必要である。いつもそこから出発すべきである。これは民主主義的な態度の要点になるだろう。民主主義というものの一つの政治の形態は、国会で話し合いをつけて、色々な問題を決めるという建前である。だから考え方もそれによつて、いくつかの政党が生れてくるわけである。今、二大政党になつた方が良いだとか、悪いだとかの議論がさかんだが、しかし政治のわからない者には五大政党であろうと、六大政党であろうとかまわらない。フランスのようによくつ政党があるかわからない国もある。それはなぜかといへば、もしも、一つの政党が絶対的な立場を取つて、おれの考え方が絶対正しいということになれば、これに反対する党が絶対間違つていふことになる、そうなれば、その存在を認めるわけにはゆかない。であるから、ブツブツいう奴は殺してしまえということになる。

今日、一国一党という形を取つているのは共產主義国以外は今のところはない。日本においても、共產主義者はそうですが、彼等は自分達

の理論の絶対性をふりまわし、俺達の考えは絶対的で間違はない、絶対的に正しいと広言してきたこれ等の人達は、人生問題というものに對して考えたり悩んだ事のない人達であろうと思つてあります。だから、これ等の国々では指導者的な立場、例えばスターリンには誤りはないといつてきたのである。スターリンが生きている時は神様に奉る以上でありとあらゆる形容をつけてこれを褒めたたえた。ところがスターリンが死ぬと、スターリンは間違いだらけで、スターリンはひどい奴だ、人に話せないよいうなひどいことをやってきたといつていふのである。自分達は絶対信じて間違いないといつていながら、その口の下から間違いだらけだとは、一体どうしたことか全く矛盾もはなはだしい。

民主主義の一つの重要な要素は、相手方の立場を信じるということである。だいたい、民主主義というものは「主義」という言葉がくついているが、それは、学問上のひとつのプリンシプルのように考えている人が多いようですが、私自身はそうではない。訳し方が悪いと思ふが「主義」と訳したのは、私共にいわせれば、自分が自由であるから他人の自由も認めようではないかという態度である。それは、ザイン (Zain) の問題でなく、ゾルレン (Solren) の問題である。本質的には、そのような意味で、

それは一つの態度である。哲学的のプリンシプルであれば、それ自体で価値がある。デモクラシーということはただ学校の講座において、理屈を云っただけでは、何の役にも立たない。生活という實際が伴わないデモクラシーは意味がない。

ところで日本では、今から十二年前の八月十五日以後、戦勝国から与えられ強制されたデモクラシーを、自分達が作り出したといったような顔つきで民主主義者になっている。八月十四日以前は、総ては絶対主義的な顔をしていたのである。ヨーロッパの民主主義を見ると数百年の時日を経過し、体験に体験をつんで作りだし、それが生活の中にとけこんでいるのである。

例えばアメリカの兵隊の様子を見るとわかるのであるが、あの人達はデモクラシーの理屈なんかいわない。又、聞いても知らない者が多い。しかし、あの人達の態度の中には自ずから民主主義的なものが滲み込んでいるから、自然に行動がデモクラチックになるのである。おおよそ日本人くらい、民主主義という言葉を使う国民はない。理屈ばかり云っている。明けても暮れても民主主義、民主主義といい、民主主義の実体も知らず、また実行がないのである。進歩主義者を取りあげて見るとそれが一番多く、理屈ばかりをいつている。

私は終戦直後、田舎へ疎開して、細々と喰う

や喰わずの生活をして生きていました。それからすぐ、世の中が民主主義になったのである。そうすると、村の人達が急に私の所へ来て民主主義を教えてくださいと云って来た。ところが予備知識が全然ない。色々話し合っているうちに、こういう定義が出来たのである。民主主義とは学校や寺の桜の木を折らざる事なりということになった。こんな馬鹿げた定義はないのであるが、そうなってしまったのである。

昨年、山口県の山奥の村長が私のところへ来て、近頃、村の青年が民主主義の理屈を言いだしてとても太刀打ができない。今日はひとつ民主主義のさわりだけでもよいから聞かしてくれといつて来たので、前に述べたように村人達と話しあつたら、民主主義の定義とは桜の木を折らないことになったという話しをしたところ、村長は胸をたたいて解つたといつて帰つていった。そんな事で解ると思いませんが、とにかく主義者になろうと思えば短時間でなれるが、これを体得しようと思えば非常に困難である。

マッカーサーは日本人を指して十二歳と云つたけれども、私に云わすと、マッカーサーは日本を褒めすぎている。なぜなら、公園の桜の花を折ると云うようなことは、ヨーロッパにおいては、幼稚園の生徒がすることだ。いや幼稚園の生徒すらやらない。五つ六つは話しがわか

るが十二ではほめすぎだ。今年日本が民主主義国になって丁度十二年、理屈は博士みたいに達者になって来たが、行動たるや幼稚園の生徒よりだらしがない。本当に民主化するには、吾々は幼稚園から実行によつて作りあげて行くべきである。理屈からは民主社会は生れてこない。結局は吾々の一人一人がこの国を支配するという自覚であろう。この国を支配する権利があると云うことは、同時に責任があるということである。民衆が国の問題を理解し、この問題を解決する慧明さと熱情が必要なのである。

民衆が国のことを考えずに自分のことばかり考えておれば、国は亡びるより仕方がないのである。

例えば、米の値上げの問題であるが、百姓は百姓で米の価格をもっとあげるといい、一方これに反対するものは安くしろという。一体何を標準にして高い、安いというのか。もつと国の立場に立つて、一体如何にあるべきかと云う提案が持ち出されていいのではないか。そういう提案は一向出ないで、それぞれの利益を中心に、それぞれ主張しているのである。もつと主権者としての立場でものを考えてもらいたい。労働問題に於いても同じことである。

日本では資本家と労働者が殺し合いをして、やれストライキだとか何んとかといつて、のべつまくなしにやっている。これでは国が興るは

ずがない。もつとドイツを見習うべきである。日本が戦勝国と同じ生活をやり、同じ労働をやって、九千万の人が生きていけるかいけないか、たいへんな問題である。それを真面目に考えている人は極めて少ない。すべて悪いことがあると、政治家が悪い、あれが悪いこれが悪いといつて、責任を他人になすりつけて、自分だけは権利を主張するというだけである。最近の汚職事件でも、政治家に対し強い非難の声があるが、政治家はもちろん悪い。しかし、主権者もあまりだらしなさすぎると云いたい。日本人は理論はともかくとして、民主主義の実行を考えていない。問題はそこから始まっていると思う。もつと、自国を自分で支配している主権者であるという自覚を持つべきである。

世界は転換している。科学は非常な勢いで発達している。科学の発達で、国境の障害はなくなつて来るであろう。その転換期を実際にその目で見、これに参画しようという、君達ほど幸福な学生はない。それを実現するために大いに頑張ってもらいたい。

(文責在記者)

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。